

# アキレスと亀

2008(平成20)年8月7日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督・脚本・編集・挿入画＝北野武／出演＝ビートたけし／樋口可南子／柳憂怜／麻生久美子／中尾彬／筒井真理子／吉岡滯皇／伊武雅刀／大杉漣／円城寺あや／大森南朋／徳永えり(東京テアトル、オフィス北野配給／2008年日本映画／119分)

……少し真面目に取り組んだ北野武監督の14作目は、国内でのヒット狙いの他、ベネチアへも参戦！ 真知寿<sup>まちす</sup>とは何ともふざけた名前だが、少年期、青年期、中年期と続く彼の芸術一辺倒の生き方は、ギャグそれとも狂気……？ また、真知寿はバカそれとも天才……？ 真知寿と幸子<sup>めおと</sup>との夫婦道は、阪田三吉と女房の小春との夫婦道との対比が不可欠……？ 続出する見せ場の後に訪れる意外に(？)まともな結末は、本気で賞狙いにきた証拠……？

## 14作目は、少し真面目に……？

『その男、凶暴につき』(89年)から始まった北野武監督作品も、『アキレスと亀』で既に14作目。12作目の『TAKESHIS'』(05年)は星2つ(『シネマルーム9』398頁参照)、13作目の『監督・ばんざい!』(07年)も星2つ(『シネマルーム15』416頁参照)と私の採点は低かったが、興行的にもこの2作品はイマイチだったよう。そこで、天才北野武監督も少し反省したのか、14作目は少し真面目に……？

ネット情報によると、北野武監督自身も、「前回、前々回と、無茶な作品をやってプロデューサーに怒られたので、今回は当たる映画をまじめにやっています。あのときはだんだんスタッフが話しかけてくれなくなったけど、今回はみんな来てくれるから面白いものに仕上がっていると思う」と語っているらしいが、さて……？

ちなみに、「アキレスと亀」とは、「足の速いアキレスも、前を歩くカメには永遠に追いつけない」というゼノンのパラドックス。売れない画家倉持真知寿<sup>まちす</sup>を主人公としたこの映画に、なぜそんなタイトルが……？

## 日本映画がベネチアを席卷？

08年5月の第61回カンヌ国際映画祭へは黒沢清監督の『トウキョウソナタ』（08年）のみが出品されたが、これが見事「ある視点」部門の準グランプリである審査員賞を受賞した。これに続けとばかりに、08年8月27日～9月6日開催される第65回ベネチア国際映画祭には、『アキレスと亀』の他、宮崎駿監督の『崖の上のポニョ』（08年）と押井守監督の『スカイ・クロラ』（08年）の3作品が出品されるという異例の事態に。『崖の上のポニョ』も『スカイ・クロラ』もアニメだから、実写映画は『アキレスと亀』のみ。

1997年『HANA - BI』でベネチア国際映画祭の金獅子賞を受賞した北野武監督は、海外では「マエストロ」と呼ばれている国際的な巨匠。そのうえ、今回は少し真面目に撮ったらしいから、受賞への期待も……。現在上映されている『崖の上のポニョ』の評判もいいから、ひょっとして今年のベネチアは日本映画が席卷……？

## 「芸術」ってナニ……？

この映画のテーマは、「芸術」ってナニ……？ これは私の勝手な解釈にすぎないが、少年期の真知寿（吉岡滯皇）は別として、青年期の真知寿（柳憂怜）と中年期の真知寿（ビートたけし）が芸術にのめり込む姿を見ていると、そう考えざるをえない。特に美術学校に通い始めた真知寿が、学校の仲間たちと共に芸術にのめり込んでいく（バカげた行動に走る？）姿を見ていると、青臭い芸術論議が少し鼻についてくる。

他方、「私なら、彼の芸術、わかると思う」と自信タップリに述べて、青年期の真知寿の妻となった幸子（麻生久美子）は経済的かつ精神的に真知寿を支えるだけだったが、中年期の真知寿を支える幸子（樋口可南子）は芸術のパートナーとして共に創作活動に従事しなければならなかったから大変。「あんたと一緒に夜描いて、昼間働いて、私はいつ寝るの？」という幸子の言葉はまさしく本質をついたもの。高校生の娘のマリ（徳永えり）から徹底的にバカにされながら、なお日々芸術にいそむ真知寿と幸子の姿は感動的であるとともに、ユーモラスを通り越してバカバカしくかつ狂氣的……？

## なるほど、これが画家と画商の関係！

いかにも北野武監督らしい皮肉がよく効いているのが、この映画が描く画家と画商の関係。映画の冒頭に登場するのは、蚤の商売や銀行業で財を成している倉持利助（中尾彬）と、画商の菊田昭雄（伊武雅刀）らがホステスを交えて騒いでいる姿。美術好きの倉持に対して、商売上手な菊田は、著名な（？）画家と組んであれこれの絵を売りつけていた。菊田の説明によると、立派な画家とその能力を理解するタニマチによって芸術は維持されるらしいが、それってホント……？

音楽の世界におけるモーツァルトやベートーヴェンそして絵画の世界におけるモディリアーニやアンリ・ルソーは、生きていた間にその芸術が全然理解されず、不遇な人生を送ったのでは……？ また、そんなキレイ事をシャーシャーと述べる口先三寸の男に限って、状況が変わればコロリと変身するもの。戦争中は「鬼畜米英」と叫んでいたのに、戦後はいち早く民主主義を唱えた人種と同じように、菊田は倉持の会社が倒産した後は手のひらを返したように、強引な債権取り立てに協力しつつ、倉持の絵をかすめ取っていくことに……。

なるほど、画家と画商の関係とは、こんな騙し騙されの関係、いや、いつも画家が画商に騙され騙されの関係！

## 父親の縁は息子にも……

世が世であれば、真知寿は大財閥の御曹司として一生好きな絵を自由に描けていたはず。そうすれば、ゴマスリ画商やゴマスリ批評家がゴロゴロいる日本では、天才とまではいかなくても、それなりに著名な画家になっていたはず。要するに、芸術ってその程度……？

ところが、マネージメント能力がゼロで、ただひたすら芸術を追い求めるしか能のない真知寿は、父親の縁を息子の代になっても引き継いだから最悪。つまり、騙され、騙されの関係が青年期の真知寿、中年期の真知寿と菊田の息子（大森南朋）の間でも続くことに。先代の菊田を演じた伊武雅刀も憎たらしい役を好演していたが、その息子を演じた大森南朋も、金儲けのうまさだけはきっちり受け継いだようで、うまく真知寿を利用しながら稼いでいたよう。もっとも、息子の売りモノは、それ以上に批評の適切さ＝意地の悪さ。

この映画後半は、真知寿が次々と創り出す作品に対する、菊田の息子からの意地悪な批評がポイント。それを真知寿なりに克服した次の作品が次々と登場してくるから、そこに注目！ それにしても、売れる絵とはどんなものかを知り尽くした画商菊田の息子の、真知寿の作品に対する批評は面白い。この映画には北野武監督自身が描いた70点以上の絵が登場するから、実はこの映画は北野武監督の絵画展を兼ねたもの……？

芸術好きなベネチアでは、そんな作品がバカ受けする可能性も十分。もしそうだとすると……？

### ギャグ？ それとも狂気？ バカ？ それとも天才？

真知寿は一貫して芸術を追究しているのだが、青年期の真知寿は美術学校の仲間たちの意見によってその方向性がコロコロ変わっていたから、自分のスタンスはあまり確立していないよう。中年期の真知寿になるとそれが一層際立ち、菊田の息子からのアドバイス(?)によって、あっちこっちにコロコロ変わっていく姿が赤裸々に描かれる。そしてそうなると、真知寿の努力によって次々と生まれてくる芸術=絵はギャグなのかそれとも狂気なのかわからなくなってくるし、真知寿はバカなのかそれとも天才なのかもわからなくなってくる。

もちろん、ネタばれになるのでその様子をここで紹介することはできないが、ギャグか狂気か、バカか天才かをあなた自身の目で確認してもらいたい。青年期の真知寿を演じた柳憂怜もそれなりにとぼけたいい味を出していたが、ギャグか狂気か、バカか天才かという演技をさせるとさすが北野武の才能が生きてくる。セリフが少ないのはいつものことだが、こりゃ久しぶりの俳優北野武のはまり役……？

### 幸子は小春以上……？

一世を風靡した村田英雄が歌う『王将』は、メロディの良さもさることながら、1番の「吹けば飛ぶよな将棋の駒に」をはじめとする歌詞がすばらしい。阪田三吉の恋女房は「小春」だが、その小春を歌ったのは、3番の「愚痴も言わずに女房の小春 つくる笑顔がいじらしい」で、これもすばらしい。阪田三吉にはこんなすばらしい女房の小春がいたが、菊田の息子のアドバイス(?)に翻弄され、次第に狂気の世界に入っていく真知寿には恋女房の幸子がいた。残念ながら小春は三吉より先に死んでし

まったが、幸子は精神的にも肉体的にもタフで元気そうだから、死ぬまで真知寿を支えて夫婦愛を貫くはず。

誰もがそう考えるはずだが、それでは面白くない。そこで北野武監督が考えた演出は、何ともすごいもの。これによって、「狂っている！」と真知寿に向かって叫んだ幸子は、遂に真知寿の元を去っていくことに。さあ、その後の展開は如何に……？

私としては、ここまでバラすのが精一杯。その後はあなた自身の目で。私と同じように、きっとあなたも真知寿に対しては「そこまでやるか！」と思うはずだが、さて真知寿と幸子の夫婦愛の行き着くところは……？ この映画の結末は北野武監督作品にしては意外にまとも……？ それは、きっと北野武監督が本気で大ヒットと賞取りを狙っているため……？ そして、こんな結末を見ると、幸子って小春以上……？

2008(平成20)年8月8日記

ミニコラム

### 受賞おめでとう①『おくりびと』

『おくりびと』が『戦場のワルツ』などの有力候補を制し、第81回アカデミー賞外国語映画賞を初受賞！ 09年2月23日そんなニュースに日本国中が沸騰した。これは08年8月21日～9月1日のモントリオール世界映画祭でのグランプリに続く快挙だ。

英語題は旅立ちを意味する「Departures」だが、それはきつとおくりびとにピッタリの英単語がないための苦肉の策。米国にそんな職業があるのかどうか知らないが、日本でも馴染みのない納棺師を主人公とした地味な映画が米国で支持されたのは大きな驚きだ。ハリウッドのリポーターは「死に対する畏敬の念を通して生をた

たえる感動作」と評したが、習慣や作法は違って、納棺師による①遺体を清める湯灌の儀、②旅立ちの衣装への着替え、③心をこめた化粧の施し、④納棺、までの美しい所作を見る中で、命に対する尊厳の気持ちが米国にも通じたのだろう。長年温めてきた企画を実現させたうえ誰もがうなる名演を見せた本木雅弘と、難しいテーマをわかりやすく様式美豊かに演出した滝田洋二郎監督に大拍手！ これを契機として、多くの映画人が米国追従ではなく、日本的な美しさを再認識し、良質な邦画創作意欲をかき立ててほしい。

2009(平成21)年3月2日記